

○また、久喜市青葉は地形的に後背湿地であるにもかかわらず、盛土までして住宅地が形成された。これは、

- ・葛蒲町に工業団地造成計画があり、従業員の住宅を用意する必要があった。
- ・久喜は東北本線と東武伊勢崎線との結節地点で、交通の便がよい。
- ・現在の青葉に当たる元の水田地帯は面積が広く、地価も安かった。

などの点を日本住宅公団が評価したためと聞いている。

しかし、この住宅地建設の場合、都市化の圧力を受ける農家の側も、すでに兼業化が進み、営農意欲が薄れていたことも見のがせない。

以上のように戦後現れた新しい土地利用は都市化の影響によるものと見られるが、このような土地利用は逆に自然条件に作用し、洪水の危険性を増している。

## 浦安町の生活基盤の変化と都市化

加藤郁子

浦安は、古くは寂しい漁村であったが、江戸期に入ると、漁業及び街道集落として栄えるようになった。これは、浦安が海と川に囲まれており、水運が盛んであったためで、これによって、江戸と密接なつながりを保っていた。

ところが、明治の中期に入ると、千葉県にも次々と鉄道が敷かれ、水運は次第に衰えていった。これと共に、鉄道路線から外れていた浦安は、周囲の発展から取り残され、いわゆる“陸の孤島”になってしまった。こうして、昭和30年代に入るまで、人口の伸びもほとんどない、閉鎖的な漁村としての性格を形作っていったのである。

この間の浦安は、全く漁業だけの町だったといえるであろう。採貝業、海苔養殖業、そして網漁業と、地先海面をフルに利用していた。そして、陸上では貝むき加工業を始めとする様々な水産加工業と行商が盛んに行なわれており、町民の殆どが漁業に係わりを持つ生活をしていたのである。

しかし、昭和30年代に入ると、町の様子も変わってきた。それは、東京都内から、工場が移転してきたことと、汚染によって漁業がふるわなくなってきたことによる。つまり、陸の孤島と言われた浦安にも、都市化の影響が及んできたのである。こうして、長い間、浦安の基幹産業として栄えてきた漁業も、昭和37年には漁業権の一部が、同46年にはその全面が放棄され、800年の伝統と歴史に終止符がうたれた。

この漁業権の放棄と併行して、浦安の海面地先の埋立事業が進められた。この事業が完成することによって、町域は従来の約4倍になり、広大な住宅地区と、工業地区及びレジャー地区ができることになっている。

また、昭和44年3月に、地下鉄東西線が開通したことにより、東京の都心と短時間で結ばれることになった。このため、駅の付近にはアパートが立ち並び、旧市街地の周辺部と埋立地区は、東京のべ

ットタウンと化した。

このように、大きな変化を遂げた浦安町は、現在、いくつかの問題点を抱えながらも、埋立地を中心として、新しい町作りが始められている。東京への通勤者が多く住む住宅地と、湾岸道路を利用した工業団地、そして東京ディズニーランドや観光漁業基地など、東京を始めとする首都圏との関連を密接に持つ埋立地区と、境川沿いの情緒ある旧集落とが、今後どのように変わっていくのだろうか。これからの町の発展に期待したいものである。

## 妙高火山東麓における土石流災害と土地利用

小林 世子

### 1) 研究の目的

昭和53年5月18日に妙高火山東麓の白田切川で土石流が発生し、死者13名の惨事となった。妙高火山は2重式の成層火山で、外輪山は数カ所で崩壊し、深いV字谷などが形成されている。過去にも、大田切川・白田切川・杉野沢部落で何度も土石流が発生している。本論では、東麓の自然環境のなかでも、災害に結びつきやすく危険性が大きい土石流に注目した。そして、土石流が起きやすい東麓の自然環境を把握し、東麓の集落、土地利用の変遷を知ったうえ、さらに土石流災害の具体例として昭和53年の白田切川土石流と約630年前の杉野沢土石流について比較検討し、災害としての土石流を考えることを目的とする。

### 2) 研究の方法

自然環境は文献とフィールド調査により、過去に東麓で発生した土石流に関しては、言い伝えなどの聞き取り調査を行なった。集落土地利用の変遷は、文献・聞き取り調査により、東麓を、北国街村・山麓の温泉集落・杉野沢の3つに区分した。昭和53年土石流は主に文献から災害を再現し、杉野沢土石流は、聞き取り調査によった。

### 3) 研究の結果

土石流は山地災害に結びつきやすい自然現象ではあるが、土石流流下それ自体を止めてしまうことは不可能である。白田切川では、多くの人為的な工作がほどこされており、それが昭和53年土石流災害を大きくしてしまったと言える。

杉野沢部落は、土石流扇状地という地形の利点を生かして立地した集落で、部落の歴史は中世にまでさかのぼる。扇状地状の緩斜面上に豊富な溪流があり山麓で唯一の農業集落である。しかし、数百年から4年に一度程度の割合で土石流が発生する可能性があり、その場合、今のところなら防ぐ手段はない。

妙高山東麓は江戸時代は北国街道の街村として、宿場などで生計を立てており、山麓の温泉はどれも地方の人々のための湯治場であった。それが、大正期・昭和期に至って、別荘開発がはじめられ、温泉のある避暑地として全国的に知られるようになった。またスキーとも結びつき、東麓一帯は特に戦後急速な観光開発を行なうようになった。現在では最も重要な産業となっている。